

ことばが辞書に入る瞬間 とき 第6回

漢字辞典を 知的に楽しむ

『三省堂 例解小学漢字辞典』編者 林 四郎

今回の辞書



三省堂 例解小学漢字辞典
第三版 新装版
三省堂 / 2009年

一 国語辞典と漢字辞典、ことばの入り方のちがい。

国語辞典を作るときには、まず、収録する見出し語の数を、五万語とか、十万語とか、あるいは二十万語とかいうように、決めます。二十万語といつたら、もう、ずいぶんな大辞典です。

漢字辞典では、最初に決めるのが見出し字です。常用漢字、人名用漢字、JIS漢字のように国家的なレベルで指定される何千かの字は、たいていの漢字辞典に収録されるでしょう。そのほか、いわゆる表外字をどこまで入れるかが、それぞれの漢字辞典で決まります。採録された見出し漢字によって、どのような日本語の単語が構成されるかを描き出して行くのが漢字辞典です。

二 漢字辞典を楽しく見る見方。

ここでは、『三省堂 例解小学漢字辞典』の編集意図と、ある字の見出し字について、その字が持つ世界の中のある部分を、どんなふうにたどり歩きをして、そこに楽しみを見出して行くか、そんな遊びのような楽しみを書いてみたいと思います。

『三省堂 例解小学漢字辞典』では、採用された各漢字が、現代日本語の中で、どれだけの造語力を持つかを示すことに、編集の主眼を置いています。

中でも重要視したのは、その字が他の字の下について、どういう単語を作るかを、語構造がよくわかるように説明することでした。ですから、この辞典では、その字が下につく熟語を観察する項目を設けて、上の字との関係がよくわかるように、語構造の説明をすることに、大いに力を注ぎました。

この点に着眼して、今、ここでは、下つきの字になつて大きな働きをする字の一例として「然」という字の働く様を見てみましょう。「然」がそういう働きをするのは、この字が「じつに……らしいようす」を表すので、その「……」の部分を表す字が、すぐ上に来ることになるからです。

左ページ上段は、『三省堂 例解小学漢字辞典』の「然」の項目です。どんな様子か、挙がっている二字例を見ましょう。

8画

然

類焦燥もよ・焦心
れる。

筆順

ノ ク タ タ 外 然 然 然 然

12画

形声 「灬」が火を表し、
「然」が「ゼン・ネン」と
いう読み方をしめしている。「エン」は「もえ
あがる」意味を持ち、火がもえあることを
表す字。借りて、「そうであること」として
使われている。

教4年 窓ゼン・ネン
訓しかし・しかり

JIS 3319

1 ① そうである。そのとおりであること。例
然が下につく熟語 上の字の働き

2 ② じつに……らしいようです。例 平然ぜん

名前のよみ のり

然が下につく熟語 上の字の働き

1 「然」(そうである)のとき
自然ぜん 天然ねん 当然ぜん 必然ぜん 偶然ぜん
未然せん ドノヨウニ そうであるのか。『未
然』は「まだ、そうではない」

2 「暗然ぜん 依然ぜん 隠然ぜん 敢然ぜん 決然ぜん
嚴然ぜん 公然ぜん 雜然ぜん 駭然ぜん 靖然ぜん
整然ぜん 全然ぜん 驚然ぜん 泰然ぜん 端然ぜん
断然ぜん 超然ぜん 陶然ぜん 同然ぜん 突然ぜん
漠然ぜん 判然ぜん 憤然ぜん 平然ぜん 漫然ぜん
猛然ぜん 默然ぜん 悠然ぜん 歷然ぜん 瞭然ぜん
(一目も瞭然) 蒼然ぜん 古色じく 蒼然)

「然」には、「ゼン」「ネン」二つの字音がありますが、右のように、様子を言い表す「ノヨウナよすか。」

「然」は、ほとんど皆「ゼン」である中に、一つだけ「默然」が「もくねん」です。これ、「もくねん」とも言いますが、「もくねん」の方が一般的です。このように、漢字の有様こそば「～然」で、「ねん」と発音されるもの、ほかに「寂然」(じやくねん)が思いつくだけで、それ以外は思い当たるものがありません。何か無いかなあと、思いをめぐらしているうちに、「ぱつねん」ということばが浮かびました。例えば、「人影の無い公園のベンチにひとり、ぽつねんと座す人」というようなことが言えます。

また、もうしばらく考えていたら、「つくねんと」ということばが出て来ました。「広辞苑」には同義語に「つくと」ということばを記していました。『大日本国語辞典』には、義経記の「むらむらと内に入つて、つくとしてぞ居たる」を例として「つくと」が出ていました。『岩波古語辞典』を見ると「何もしでほんやりしているさま」とあり「つくと」「つくりと」が、同語異形として挙げてありました。例文は、源平盛衰記の「危きながらつくとしてこそ立ちたりけれ」でした。なるほど、納得しました。

「黙然」「寂然」の「然」は、確かに「ねん」と発音する漢字音でしたが、「ぱつねん」や「つくねん」は、漢字「然」とは関係がないもののように見えます。しかし、私たちの頭の中では、つながっていて、「つくねん」「ぱつねん」が、いかにも「つくり」「ぱつり」と、それひとつだけでそこに孤独に存在している様子を表しています。すなわち、これらの「ねん」は、「然」の字の働きを、現にしているわけです。

「然」の字が上に立つ単語を一つだけ示すことができます。「然諾」です。「イエス」と言って承諾することです。このことばを、今は、私たちは日常には殆ど使いませんが、このことばが「承諾」と同じようでいて、用い方に違ないことがあります。「然諾を重んずる」を「承諾を重んずる」と言いかえることはできません。「然り」は「そうである。」と積極的に認定する、プラスの判断姿勢を表すのだということが、これでわかります。ですから、「然」の字は、現代日本語の中では、多く下つきの字として働いているのだけれども、その意味の根本は「そうである」と判断する働きを示すことにあるのだということを、しっかりと学習しておくことが必要なのであります。『三省堂 例解小学漢字辞典』で、この字の意味を①そうである。②じつに……らしいようです。』と、二つかかげているのは、そういうわけです。

はやし しうう 一九二二年、東京都の生まれ。東京大学国文学科卒業。国立国語研究所名誉所員。筑波大学名誉教授。北京外国语大学名誉教授。